

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520437

研究課題名（和文） モダリテートから見た古高ドイツ語の接続法

研究課題名（英文） On the subjunctive in Old High German from the point of view of modalities

研究代表者 黒沢 宏和（KUROSAWA HIROKAZU）

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：20264468

## 研究成果の概要（和文）：

古高ドイツ語では、現代ドイツ語に比べ頻繁に副文において接続法が用いられる。この接続法は、これまで主文への従属の目印として、あるいは主文から副文への影響によると解釈されてきたが、この見解には議論の余地が残されている。特に後者の場合、なぜ本来は直説法であるはずの副文の定動詞が主文の影響によって接続法になるのか、解明されていない。そこで本研究は、副文におけるモダリテート（Modalität）という観点からこの問題にアプローチすることを課題とした。そして具体的数値を示すことによって、この手法の限界と可能性に言及し、従来の解釈に異を唱えた。

## 研究成果の概要（英文）：

In Old High German language, the subjunctive appears more frequently than in New High German. This is particularly conspicuous in subordinate clauses. The question is why the subjunctive was so frequently used in subordinate clauses. Earlier scholars tended to regard the subjunctive as *the tying mood* between main and subordinate clauses.

It is often noticed that in OHG the finite verb stands in subordinate clauses because of influences from the main clause, although it should actually stand in the indicative. It is not clear why the subjunctive is used instead of the indicative; also, the influencing factors in main clause are far from being completely understood.

In my research, I aimed to explain the subjunctive in OHG in subordinate clauses from the point of view of modalities. In OHG, the subjunctive appears not because of influences from the main clause, but owing to the mood (modus) appropriate to the modalified context.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：モダリテート、接続法、古高ドイツ語、タツィアーン、聖書翻訳、ラテン語

### 1. 研究開始当初の背景

古高ドイツ語『タツィアーン』は、四つの福音書を解体・再編集した総合福音書であり、ラテン語－古高ドイツ語対訳のいわゆる行間逐語訳聖書の一つに数えられている。この『タツィアーン』の法 (Modus) に関する問題を専門的に扱った研究としては、唯一 K. フェルスター :*Der Gebrauch der Modi im ahd. Tatian* (1895) がある。彼は『タツィアーン』における法の用法は、同時代の『オットフリート』、『ノートカー』、そして『イシドール』と比べても大差なしとし、従って法の使用に関しては『タツィアーン』はラテン語の影響をあまり受けておらず、ドイツ語の独自性をよく反映している (S. 62)、という結論を導いている。

この見解に反論する形で、やはり法の使用に関しても、ラテン語から古高ドイツ語へと翻訳する際、ラテン語のテキストにおけるモダリテートの有無が翻訳者の語感に影響を及ぼしているため、詰まるところ、『タツィアーン』の古高ドイツ語の翻訳は、法の使用に関してもその手本となるラテン語テキストを十分に考慮したものであった、という結論を導き、著書としてドイツで出版した (Kurosawa: *Über den Modusgebrauch im althochdeutschen Tatian aus der Sicht von Modalitäten. Semantische und statistische Untersuchungen zur Modusdifferenz zwischen dem Lateinischen und dem Althochdeutschen.* Hamburg, 2009)。

かくして、古高ドイツ語の法研究にモダリテートが極めて有効であることが判明したので、なぜ古高ドイツ語の副文において接続

法が頻繁に現れるのか、という問いをモダリテートの観点から解明しようという着想に至った。

### 2. 研究の目的

古高ドイツ語では、副文において接続法が多用されるが、この現象は従来の解釈では 1) 主文への従属の目印、2) 主文の影響によるとされてきた。しかしながら、これらへの見解には議論の余地が残されている。そこで本研究では、1) ラテン語の影響、2) モダリテートという新しい視点を導入し、説得力のある新しい解釈を試みる。なぜなら、前項で述べたように、古高ドイツ語は多かれ少なかれラテン語の影響を受けているにも拘らず、従来の研究にはこの視点が欠けていたからである。さらに古高ドイツ語の接続法を考察する際、モダリテートが有効であることは、Kurosawa 2009 によって実証済みであるからである。本研究では、830 年頃フルダの修道院でラテン語から古高ドイツ語へと翻訳された古高ドイツ語『タツィアーン』を考察の対象とした。

### 3. 研究の方法

高橋は『古期ドイツ語文法』(1994:176-177) の中で、主文の影響で、副文の定動詞が接続法となるのは、次の四つの場合であると明言している：

- (1) 主文の定動詞が接続法の場合
- (2) 主文の定動詞が命令法の場合
- (3) 主文が疑問文の場合
- (4) 主文が否定文の場合

本研究では、主文から副文への影響を最大限考慮すべく、ラテン語・古高ドイツ語対訳の『タツィアーン』の中から、高橋の挙げる四つのケースをすべて取り上げ、尚且つ古高ドイツ語では副文の定動詞が主文からの影響によって接続法となっているものの、その手本となるラテン語では直説法のみである 94 例をピックアップした。

この方法を採用することによって、1) ラテン語から古高ドイツ語への干渉、2) (古高ドイツ語における) 主文から副文への影響の両者を考慮することができる。この94例の古高ドイツ語の副文をモダリテートの観点から精査した。

#### 4. 研究成果

本研究の成果として、以下の3点を挙げる  
ことができる：

(1) 94例中69例(73,4%)においては、モダリテートという観点から見れば主文の影響ではなく、コンテキストの意味内容に合致した法として接続法が用いられている。

(2) 古高ドイツ語の副文において頻繁に現れる接続法を、モダリテートの観点から73,4%は説明可能である。この結果から、一方で従来の解釈に異を唱えることができた。他方、26,6%はモダリテートの観点からは説明できない。換言すれば、古高ドイツ語の副文に現れる接続法にモダリテート理論を応用するこの方法論の有用性を、具体的数値で示すことができた。

(3) ゲルマン語やドイツ語の接続法の用法は、一般に意志を表す接続法(Voluntativ)と可能法(Potentialis)の二つに分類されるが、意志を表す接続法はわずか3例(3,2%)のみであり、古高ドイツ語の副文で多用された接続法は、可能法が圧倒的に多い。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① Hirokazu KUROSAWA: Über den Konjunktiv in althochdeutschen Nebensätzen: Zweiter Teil — aus der Sicht von Modalitäten — (In: Southern Review No. 27, S. 7-19, herausgegeben von Foreign Language & Literature Society of Okinawa, 2012, 査読あり)
- ② Hirokazu KUROSAWA: Über den Konjunktiv in althochdeutschen Nebensätzen — bei fragendem und

negiertem Hauptsatz— (In: *Die Deutsche Literatur* 56, S. 29-47, herausgegeben von der Gesellschaft für Germanistik der Kansai-Universität, 2012, 査読あり)

- ③ Hirokazu KUROSAWA: Über den Modusgebrauch im althochdeutschen Tatian: Vierter Teil. — dixerit: Indikativ Futur II oder Konjunktiv Perfekt -- (In: *Die Deutsche Literatur* 55, S. 55-74, herausgegeben von der Gesellschaft für Germanistik der Kansai-Universität, 2011, 査読あり)

[学会発表] (計3件)

- ① 黒沢宏和: モダリテートから見た古高ドイツ語の副文における接続法(2) —その限界と可能性— 沖縄外国文学学会第27回大会(2012年7月7日 於: 名桜大学)
- ② 黒沢宏和: モダリテートから見た古高ドイツ語の副文における接続法—主文が疑問文・否定文の場合— 沖縄外国文学学会第26回大会(2011年7月2日 於: 琉球大学)
- ③ 黒沢宏和: 古高ドイツ語『タツィアーン』における翻訳手法—*dixerit*:直説法未来完了形か、接続法完了形か— 京都ドイツ語学研究会第72回例会(2010年9月25日 於: キャンパスプラザ京都)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

黒沢 宏和 (KUROSAWA HIROKAZU)

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：20264468